

日吉台地下壕保存の会会報

第70号

日吉台地下壕保存の会

2004年度総会のお知らせ

昨年も1年間にいくつかの大きな取組みをし、そして着実に1歩1歩前へ歩み続けていると思います。夏に戦争遺跡保存全国シンポジウム大分県宇佐大会の参加、「横浜・川崎平和のための戦争展」は慶應義塾大学連合三田会当日に開催し2000人からの見学者がありました。地下壕の見学会では約2000名の方を案内しました。また、現在も継続中ですが「航空本部地下壕入り口のマンション建設問題」など大きな問題も持ち上がっています。

この数年の世界情勢をみていると衝撃的な事件が世界中で起きています。9.11、イラクでの戦争、最近ではイスラエルのハマス指導者へのテロ、そしてそれを一定の理解を示すアメリカなど挙げれば切りがありません。1つ1つの事件には強い関心が向き、事件を繋げて考えることがなかなか難しくなってきたような気がします。しかし、それを解くキーワードはあります。それはイスラムではないでしょうか。今年の総会では『中東・イスラムそして戦争』と題して湯川武氏（慶應義塾大学教授）に講演をお願いしました。氏は中東・イスラムの歴史がご専門でエジプトに留学、エジプト大使館に勤務もある方です。イスラム社会の世界観や歴史などイスラム社会を理解するための根幹の話が聞けると思います。

右の絵にあるように子供たちにはギターと銃を持たせるのではなく、ギターだけを弾かせる世界を築かなければならないと思います。

記

日時：2004年5月29日(土) 1時より

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス

「来往舎」大会議室(2F)

講演：1時～2時30分

『中東・イスラムそして戦争』

湯川 武 氏

(慶應義塾大学商学部教授)

総会：3時～4時30分



緊急報告

以前会報でお伝えしてきましたように、日吉台地下壕航空本部入り口4ヶ所が斜面緑地マンション建設に伴い、破壊されそうな情勢になってきました。保存の会は地域の住民の方々と共に保存のための運動をしてきましたが、この3月に横浜市はマンション建設の許可をしました。まだ満足な学術的調査もなされないうちに、国民的、歴史的史跡が一業者の利益のために破壊されそうな状況です。これは西欧の国々と比べ、日本人の歴史認識の貧困を象徴する事柄となると思います。会員の皆様には、是非この件ご注目の上、史跡保存にご協力下さいますようお願いいたします。以下は詳細な活動報告です。(運営委員：谷藤基夫)



斜面緑地マンション建設による 航空本部地下壕の破壊を許さない

○ 開発許可処分に対して審査請求をしました

去る3月23日私たち(日吉台地下壕保存の会運営委員会有志及びマンション建設に反対する住民の会)は、横浜市開発審議会に対して、審査請求書を提出しました。文化庁が2002年の夏に決めた近代遺跡指定調査(50ヶ所)が2003年度中に終わることが出来ないために、2004年にずれこむことが決まっているにもかかわらず、横浜市は開発の着工が即時可能となる開発許可を3月19日におりました。文化庁もこのような事態を知りながら手出しをすることが出来ません。ただ横浜市文化財課は、開発許可が下りることを想定した上で、業者と話し合い、着工によって地下壕を破壊する前に、調査を実施することを業者に約束させています。また、3月30日に文化財課の審議委員が地下壕に入って予備的な調査をし、近日中には本調査を実施する予定になっています。

私たちは業者に対し、独自の調査をさせるよう申し入れましたが、業者は今後一切のマンション建設反対運動はしないという念書を入れるなら許可するという回答をし、事実上の申し入れ拒否をしました。これは3月20日の業者による地元説明会での発言を反故にするものであり、怒りを禁じ得ません。また私たちは、審査請求書とともに、執行停止申立書により、工事の執行停止の申し立てもしました。審査請求に数ヶ月の時間がかかり、その間に着工されたら、審査請求する利益が喪失し、その意味がなくなるからです。ところが、開発審査課の事務局の話では、この執行停止の審査結果が出るにも結構な時間がかかるとのこと、その間に業者が着工し、地下壕入り口が破壊される可能性もあることが分かりました。審査会の結果が出る前に破壊させないため、審査会から業者に執行停止の判断が出るまでは着工しないよう連絡できないのかとの申し入れに対しては、前例がないとのことでした。残るは、詳しいことは分からないのですが、現状保存のための仮処分を裁判所に求めることです。しかし、そのためには工事費用の三分の一の供託金を納める必要があるとのことでした。全く無茶な話です。結局審査請求といったものも形式的な手続きなようで、業者の実力行使に対しては対抗できないようになっているようです。(保存の会運営委員；茂呂秀宏)

館山「赤山地下壕」見学会 ピース・ツアーのご案内

アジア太平洋戦争下の東京湾防衛構想を探る

新緑ゴールデン・ウィークの一日を会員相互の親睦と歴史探訪の旅に出かけませんか？

東京湾の入り口館山は、昔から軍事戦略上重要な役割を果たしてきました。20世紀に入り東京湾要塞地帯の拠点として館山海軍航空隊、館山海軍砲術学校など様々な軍事施設が置かれました。「赤山地下壕」はアジア太平洋戦争以前から海軍が地下航空要塞として秘密裏に掘削し、本土決戦に向けても「日吉台地下壕」と並んで重要な意味を持つ「地下軍事施設」です。

この夏の「第7回戦争遺跡保存全国シンポジウム」は館山で行われ、海軍航空隊の基地跡、掩体壕の残る茂原と館山一帯の軍事施設跡の見学会も予定されています。今回は事前学習の意味を含めて、ゆっくりと少人数で見学するために企画しました。

館山市と茂原市はこのシンポジウムに対し協力的で、特に館山市は「赤山地下壕」を史跡指定する方向であり、2004年4月から南房総文化財・戦跡活用フォーラムを発足させ、民間と自治体との協力による戦跡活用の準備が進んでいます。

さらに館山市では戦争遺跡を「まちづくり」の視点から平和学習教材として保存活用するという画期的な「館山歴史公園構想」を発表しています。こうした行政と民間との協力的な関係にみられる取り組みを「日吉台地下壕」の保存運動でも是非学んでいきたいと思います。

今回のツアーはマイクロバスで行き、現地で保存運動に取り組んでいる高校の先生に案内をお願いしています。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

記

日 時：2004年5月4日(火)

見学地：館山海軍航空基地跡及び「赤山地下壕」他(資料あり)

時 程：7:50 集合 慶應大学日吉キャンパス入り口

8:00 出発 アクアライン経由 木更津～館山

昼頃 現地着

昼食後見学(3時間コース)

16:00 館山発

19:00 日吉駅 解散

費用：1人5千円(バス・レンタル料金、保険料、ガソリン代、高速料金等)昼食代別

参加者：25人(先着順)

申込み：必ず往復はがきにて下記までお申し込み下さい。

〒194-0045 町田市南成瀬6-7-8 谷藤基夫 宛

参加者の人数、参加者全員の氏名、代表者の住所・電話番号・FAXを明記

締切り：2004年4月26日必着

問合せ先：亀岡敦子 TEL 045-561-2758

◎地下壕見学者の感想から

「日吉台地下壕を見学して」

調布高等学校3年 高橋章香

先日、慶應大学日吉キャンパスを訪ねた。キャンパスに今も残る戦時中に海軍の中枢部がおかれた地下壕を見学するためだ。しかし私はそれまで、この横浜に重要な戦争遺跡が存在するとは知らなかったのだから、本当にあるのか信じられないような気持ちだった。

地下壕は想像とは全く違っていた。私は壁は土のままで狭く、息苦しいものを想像していたが、実際はコンクリートで固められ、空気の通りも良く、今でもこもっていられそうだった。今は所々に照明があるとは言え、懐中電灯で照らさないと歩けないほど暗いが、当時は蛍光灯が使われ、とても明るかったと聞いて驚いた。長官室や発電機室跡を見て当時の様子を思い浮かべ、ここが海軍の中枢部だったのだと実感した。

この地下壕を掘った人達はどのような思いで掘り進めていたのか。海軍兵だけでなく民間の労働者も掘削に関わったと聞く。つらい労働の中で亡くなった人も大勢いるだろう。無理矢理異国の地に連れてこられ、なぜ自分がこんな目に遭わねばならないのかと涙した朝鮮人もいるだろう。私たちの現在の平和は先人の尊い犠牲のもとに成り立っているのだと改めて思い知らされた。

地下壕を見学する数日前、ビキニ環礁で被爆した大石又七さんのお話を伺った。「武器だけでは平和は守れない」と核廃絶を大石さんは訴える。武器を持っていればいつかそれを使うときがきてしまう。戦争が再び起きてしまう、と。

戦争の残酷さや核兵器の恐ろしさを身をもって知る人達は年々減りつつある。私は今回地下壕を見学するという良い機会に恵まれたが、この地下壕の存在を知らない人達がまだ多いのではないかな。もっと多くの人達に地下壕の存在を知ってもらい、戦争や核兵器のない未来につなげていきたい。

「第五福竜丸」 「日吉台地下壕」 見学会に参加して

調布学園高校(保護者) 若林瞳美

私は所謂戦争を知らない世代です。懐かしさや珍しさも手伝って、今回の見学会に参加した不届き者です。今まで戦争と聞くだけでそっぽを向いて無関係という顔をしていました。

長崎、広島の前爆は有名ですが、焼津市で生まれ育った私ですら、第五福竜丸の事件はビキニ環礁で被爆した位のことしか知りませんでした。(知ろうとしませんでした。) 現地の方や乗組員やその家族の方々のその後についても。毎年、三月一日になると行われる追悼集会を新聞やテレビで見るといいくらいでした。見学をし、私自身が何も知らずに恥ずかしい思いをしたと共に、乗組員やその家族の方々に焼津という街が冷たかったのではないかと悲しくなりました。

また日吉台地下壕の見学会では、慶應大学の用地に入れるなどと甘い考えで申し込みました。義母が日吉本町の生まれで、横浜大空襲で近所が焼けたこと、運良く実家が焼け残ったことなど聞いていました。「海軍が丘に上がった。戦争ももう負けだ。」と祖父が言っていたそうです。でも先日先生のお話を伺って「丘に上がったのは何とか戦争に勝とうとするための手段。」ホッとしました。負けるために丘に上がったのでは悲しすぎます。

「ピースロード多摩丘陵」知っている名前がたくさんあり、歩いてみたくなりました。

戦争という大きな体験はしていませんが、先日来、子どもたちと戦争についてよく話すようになりました。さすがに高二の息子は「イメージが暗い。」とすぐ片づけてしまいますが、中一の娘や小四の息子は見学会の資料や私の感じたことに耳を傾けてくれます。

「戦争の悲惨さ」だけではなく何故戦争が起こってしまうのか、戦争によって失われるもの、立ち直るまでにどの位の努力や犠牲が必要か等々、子どもたちに伝えていかなくてはいけないことと思いました。特に今、こんな平和ボケした世の中だからこそ。懐かしさと珍しさで参加したこの見学会でしたが、私にとって「戦争」をきっかけの入り口になりました。一過性で終わることのないよう、またこのような機会があれば進んで参加したいです。ありがとうございました。(ピースロードは歩くつもりです。)

書籍紹介

日吉台地下壕はじめ戦争遺跡に関するもの

①『戦争を歩く・見る・ふれる ピースロード多摩丘陵』

(編) 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会 教育史料出版会 1600円

多摩丘陵には古代・中世・近世の遺跡も多く見られますが、昭和のアジア太平洋戦争を語る建物や壕や碑などが多数残っています。本書では日吉台地下壕、蟹ヶ谷通進隊地下壕、登戸研究所、宮崎台東部62部隊跡、八王子浅川地下壕などを写真や図表を豊富に使って紹介しています。戦跡保存の意義や保存運動の実態にも詳しく言及しています。(2001年出版)

②『戦争遺跡から学ぶ』

(編) 戦争遺跡保存全国ネットワーク 岩波ジュニア新書 800円

1980年代から全国的に戦跡の調査・学習・保存の活動が始まりました。それを一つに結んで保存・継承・活用を目的とするネットワークが1997年に結成されました。本書は全国に残る戦跡を分かりやすく紹介し、さらにそこから何を学ばよいか考えさせてくれます。(2003年)

③『日本の戦跡を見る』

(著) 安島太佳由 岩波ジュニア新書 780円

写真家安島氏が撮影した、北海道から沖縄までのおよそ100ヶ所におよぶ戦跡の写真集です。美しい白黒写真が強く語りかけてきます。また作者の文章は読みやすく感銘を受けます。上記『戦争遺跡から学ぶ』とあわせると戦跡が立体的に見えてきます。(2003年)

④『しらべる戦争遺跡の事典』(2002年)

『続しらべる戦争遺跡の事典』(2003年)

(編) 十菱駿武・菊池実 柏書房 各3800円

各400ページ以上の分厚い事典です。しかし事典というイメージよりはるかに読みやすいものです。個々の戦跡は詳しい解説と共に写真や地図が多く載せられていてガイドブックと

しても最適です。また史料は多岐に渡り、戦跡にとどまらず、近現代史を調べる参考書として興味深い書物です。

⑤『戦争遺跡保存全国シンポジウム報告集』第2回～第6回大会

戦争遺跡保存全国ネットワーク発行

毎年夏に各地持ち回りで開催される全国大会の報告集です。研究発表や保存の実情が具体的に述べられています。これは書店では入手できませんので、会に申し込みください。実費でおわけします。

寄稿

戦中・戦後の私の学生生活 (1)

柳屋 良博

柳屋良博氏は旧制山口中学から昭和19年4月慶應義塾大学文学部予科入学、勤労働員の後、昭和20年6月山口で陸軍に入隊、終戦後復学、慶應大学卒業後慶應大学日吉研究室職員、慶應大学三田情報センター整理課長、日吉情報センター副所長等を歴任され、平成4年3月定年退職されました。この度戦中、戦後の慶應義塾大学の一学生としての生活を詳細に書きつづっていただきました。貴重な記録ですので、今後何回かに渡って連載いたします。お楽しみにお読み下さい。

(運営委員)

昭和19年度 大学予科1年

昭和19年3月5日、大阪府堺市浜寺公園の羽衣高女で慶應義塾大学予科入学試験の一次が行われてこれを受験、上京して3月20日二次試験を受け(信濃町・医学部・北里図書館講堂で口頭試問、病院内で身体検査)、昭和19年4月慶應義塾大学文学部予科に入学した。当時は六大学野球も行われておらず、口頭試問に備えて福沢諭吉について調べてみたが、使用していた国史教科書の一か所に名が挙げられているにすぎず、慶大については何の知識も持ち合わせていなかった。入学試験が東京の外に大阪で行われるのであれば、山口県在住の私にも受験が可能となり、京都の三高に進学した友人と二人で受験したのである。

予科校舎(日吉第一校舎)の正面玄関右側(南側)は大日本帝国海軍軍令部の専有するところであり、生徒は左側部分を使用した。このため生徒の出入りは主として第二校舎(医学部予科)に面した出入口を使っていた。なお南寮は連合艦隊本部として使われたと聞いている。一年生の自分たちは一階だったが、特定の固定した教室ではなく時限ごとに移動したように記憶する。第一校舎裏には木造校舎二棟(第一館、第二館)があつて授業を受けたことがあり、数クラス合同の動員説明会などには、第一校舎二階中央の図書室(現国語科・社会科・数学科教員室)が使われた。県立山口中学校卒の目には、屋上に無線アンテナが林立し、壁の分厚い鉄筋の校舎は、まるででっかい一隻の軍艦のように思われた。北寮は塾の学生寮として使われており、クラスメートを訪ねた時には、ちょうど急ピッチでコールタールが塗られて迷彩が施されているところだった。クラスメートの話では、近いうちにこの寮を出て、駅の向う側の野球場の木造合宿所に移るということであつた。広大な陸上競技場の一角では作業中の海軍兵士の姿を見ることもあつたが、いつの間にやら第一校舎正面前には二基のコンクリート製の防空壕出入口ができ、警報が鳴ると海軍さんや女子職員の出入りする姿が見られた。

親元を離れての初めての下宿生活は、日吉校舎の下見にきて、駅の反対側、駅前近くの八百屋さんに尋ねて決まったものである。食糧事情の悪い時代であったが、昼食ぬきの二食付きで横浜市港北区日吉本町1851奥村長生方に下宿させてもらうことになった。他に藤原工大予科を含めて三名かの生徒が世話になっており、食堂で食事をとった。初め一階の六畳に、その後静かな二階の四畳半に部屋を変えた。駅前にはかなり大きな丸善書店（現工事中で建物無し、亀屋の駅側）と徴用のために店を閉じたと思われる数軒、少し離れた所に郵便局があるくらいで、駅前から五本の街路が放射線状に伸びた、閑静な新興住宅地だったように思う。駅から下宿までの間には古本屋山村書店（現Starbucks Coffee）と一軒の食事処があったと思うが、いつも休業状態だった。背景となる丘陵には赤瓦葺きの文化住宅が幾軒か点在するだけの緑の丘で、牧場もあると聞いた。朝の散歩で、放射線街路の奥の方、下田町にはラグビー場・野球場などがあり、〈日本ラグビー蹴球発祥記念碑〉という碑を読んだ記憶がある。

5月15日から二週間、勤労奉仕のため栃木県下の村の集会所での分宿があり、ここから農家の応援に出向いた。下都賀郡の何処だったか思い出せないが、小山で乗り換えたように思う。作業内容は、時期から考えて麦刈りだったようだ。お茶請けに赤蕪の漬物が出されたが、私には珍しかった。帰校するとまもなく中間試験が行われ、ほとんど勉強もしていないのに、入学後初めての試験とあって相当緊張した。8月夏休み帰省中と記した丸帽姿の写真が一枚残っているの、夏期休暇があったようだ。そういえば関西・広島方面の友人たちと一緒に東海道線を下ったのが、この時だったかも知れない。

大學予科一年は文・経・法合わせて一二クラスだった。外部から受験して入学した生徒と無試験で内部進学した普通部・商工学校の生徒と、合わせて数百名が在籍していた。『慶應義塾百年史』等を見ても学生数は明確ではなく、私の記録にもないが、昭和19年より入学定員減少と記載されている。A組からK組までは第一外国語を英語、第二外国語を独語とするクラスであり、私たちのL組は英語を第一、仏語を第二とする者と、五～六名の独語を第二とする者を合わせ五〇余名だったと思う。クラス担任は一ノ瀬恒夫先生で、先生の専攻はドイツ語・ドイツ文学であり、週一度のゲーテ・ファウストの話と生徒の自己紹介・研究発表の指導が先生の担当だった。授業には欠席者がいたが、一週の間割では丸一日と半日が軍事訓練に当てられ、この日になると出席する珍しい顔が増えた。これは旧制中学での教練の成績と予科での出席日数とが、入隊後の幹部候補生採用試験の合否を左右するからであった。中学時代は武器庫に三八式歩兵銃が一人宛割り当てられていたが、予科では一丁を幾人かで共用するので責任感も薄く、油塗りの手入れは疎かになった。査閲（軍事教練では成績を実地に調べることもあり、査閲官がいた）では、日吉から多摩川河辺まで銃を担いで中原街道を往復させられた。

昼休み直前の授業が終わると、赤屋根食堂に駆けつけて行列をつくらないかぎり売り切れで、その日は昼食抜きとなってしまった。お米ではなくうどんを細切れにした代用食であっても、食糧事情が悪くなる一方の配給下では、自宅通学者であっても一人分外食ができれば、家計には大助かりであったからだ。お陰で下宿している者には災難だった。母からは卵・砂糖・飴ぬきで小麦粉を焼いた擬似どら焼き風の皮、梅干のお結び、干し柿などの小包を毎週のように送ってきて、多少の儼などは気にもしないで口にした。石鹼をお土産に日吉近くの馴染みの農家を訪れ、富有柿や梨を売ってもらう友人のお供をして、多少分けてもらったが、その場所は思い出せない。私の方は買い求めた図書を一貫目の小包にして、わが家に送ったが、郵便局の受付個数には制限があった。勉学だ人格形成だとはいっても、しょせん私は食べ盛りの若者に過ぎなかった。（以下 次号に続く）

◎ 活動の記録 (2004年1月～4月)

2004年

- 1/15 第7回運営委員会 会報69号発送(慶應高校物理教室)
 1/24 定例見学会 18名
 2/6 地下壕見学会 神奈川 生協労働組合 31名 地下壕内ライト取り替え
 2/20 第8回運営委員会(慶應高校物理教室)
 2/28 地下壕見学会 午前 慶應112年三田会 41名
 午後 定例見学会 77名 海兵76期の方、鴨居中学校2年、保護者他
 3/4 地下壕見学会 調布学園高校3年、保護者 20名 地下壕内写真撮影
 3/9 地下壕見学会 エンジニアリング振興会地下開発利用センター 36名
 3/11 地下壕見学会 東京多摩公団自治会協議会 49名
 3/17 地下壕見学会 第9回運営委員会(慶應高校物理教室)
 3/20 航空本部地下壕部分のマンション開発について、住民説明会に参加
 (開発業者の説明会; 3/19に横浜市が開発を許可)
 3/26 地下壕見学会 川崎医療生協職員他 20名
 3/27 定例見学会 40名
 (3/30 横浜市文化財課、航空本部地下壕の調査を開始)
 4/2 平和のための戦争展実行委員会(日吉地区センター)
 4/6 臨時運営委員会(慶應高校物理教室) 航空本部地下壕のマンション開発の件
 4/7 地下壕見学会 藤沢三田会 40名

■ 4/20 第10回運営委員会 会報70号発送(慶應高校物理教室)

4/24(土) 定例見学会

5/29(土) 定例見学会

▲ 定例見学会は毎月第4土曜日に変更になりました。なお日程が変更になる月もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。

見学会申込先 TEL&FAX 045-562-0443 喜田

連絡先(会計) 白鶴邦子: 神奈川区白幡向町20-49 045-402-9090

(見学会・その他) 喜田美登里: 港北区下田町2-1-33 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会

旧制高校の入試に失敗した負い目は長く尾を引き、教師が教室に見えるまで、ウクレレを爪弾き『八百屋お七』を歌ったり、窓を開けて喫煙後の紫煙を出したりで、私大予科の実態を知らされた思いが強かった。徴用工に引っ張られるにしても、学校をやめて親元に帰りたいと訴えたが、母は妹の世話を知人に頼み、一か月ばかり私の下宿に同宿して食事の世話をしてくれたことは、恥ずかしい思い出である。

都内の交通には疎いので、渋谷駅から須田町行きの都電に乗り、神保町で古書を捜すのを生きがいとしたり、新橋行きで六本木の古本屋に足をのぼし、新刊の『解析概論』を買って、これを私の求める古書と交換したこともある。これらの幾冊かが、戦後の学費に化けてしまうとは思わなかった。空襲が続くと古本屋の店頭には買いたい本が増える一方、こちらが持ち込む古本には見向きもされないで買い取りを断られた。当時は新刊書といえば理科系のものばかり、人文科学・文学関係のものはまず出版されなかった。

文・経・法の所属学部の区別をなくし、年齢別のクラス編成が行われたのも、理工学・医学系以外の学生の徴兵猶予が撤廃されて、生徒がいなくなってしまうクラスもあるからだった。昭和18年3月の旧制中学卒までは上級学校進学のために一年の浪人が許されたが、19年3月卒業生からは進学か徴用の二者択一となり、浪人して再挑戦することはできなくなった。

家宛の手紙の文面から思い起すと、9月19日前後、旧友数名との下校途次、日吉駅方向から坂道を上がってくる配属将校・川生大佐に出会い、私だけが欠礼してしまった。詰問を受けて教官室に連行され、欠礼の理由を糾されて不適切な返事をしたらしく、学籍簿の保証人・第二保証人の身元を確かめられ、ともに現役将校であることが判明し、しかもかつて習志野演習場で父を知っているとのことだった。しばらくの間は、授業中であっても呼び出されて、塾出身かの年若い中尉の指導を受けていたが、「今は大人しくしている」と温かく諭されたことがある。

L組では10月まで授業が行われていたが、ついに11月7日から亀戸の風船爆弾造りに駆り出された。動員先は二階か三階建ての精工舎の近く、新しく監督官の将校が派遣されることになった元染め物工場で、亀戸六丁目と七丁目の境にあった日本擬革（あるいは皮革）株式会社だった。トイレット・ペーパーのように束に巻かれた和紙と和紙をコンニャク糊で貼り合わせ、蒸気の通う大きなドラム上を回転・乾燥させて、紙の間に空気が入り込まないように手で撫でつけながら巻き取るのである。コンニャクの粉を水で捏ねて四斗樽に糊を造る級友もいた。グリセリンに漬けて処理すると弾力がでるとかで、両国・国技館や有楽町・日劇などで縫製加工して風船が造られると聞いた。工場はやがて昼夜三交替制の稼動となり、深夜勤者にはサツマイモの粉で作った平たい餅が給付され、自宅から通勤する同僚がまずいというものでも、空腹の身にはとてもうまかった。ただ続けていると舌や胃袋に変調をきたした。

入学時の下宿先から昭和20年2月下旬、西山寮（目黒区駒場町795）に引越した。ここは広津和郎夫人の妹・神山かねさんが経営し、姪の広津桃子さんが女学校で教鞭をとってお母さんと生活しておられた。動員先の亀戸までの所要時間、雨・雪で不通になることが多く、帰りが遅いと元住吉止まりとなって日吉まで歩かされる東横線に愛想を尽かしたのと、一日二食付きよりも三食付きの下宿が何よりの魅力だったからである。

工場は昭和20年3月10日の空襲に遭って壊滅したという、たまたま私は徴兵検査を本籍地山口県萩市明倫館国民学校で受けるため離京中で、兵役は近眼のため第一乙種となった。3月11

日品川駅に帰り着くと、駅頭ホームの騒然と放心したような異様な空気を肌を感じた。工場には下谷商業二年生の少年たちも動員されて『お山の杉の子』を歌いながら働いており、女子挺身隊の人たちも見かけたが、この大空襲でどうなったか気がかりである。機械の轟音や少年たちの歌声に負けじと、六号機の私たちは、明けても暮れても牢屋は暗いと『黒い鳥』や旧制高校寮歌をがなりたてた。

次の動員先は3月18日からの内務省土木出張所であった。鶴見駅近くの国道造成工事の現場で、トラックに土を入れて所定の場所まで押して行く土方仕事だった。その頃強制疎開家屋の取り壊しにも当たったが、中目黒駅回りだったとは思うものの確かではない。

昭和20年度. . . 大学予科二年

昭和20年4月5日学校に集合して新たな動員先の説明があった。すなわち南武線鹿島田駅の芝浦電気特殊鋼の組み立て工具研磨係で、ここでは旋盤操作を教えられた。二等辺三角形の形をした特殊鋼を先端に固定した金属棒を旋盤に取りつけ、金属を削るのである。左右の手を同時に逆方向に回すことがまだ会得できないでいた16日、この工場も空襲でやられてしまった。崩壊した建物の中からバイト（金属を削る刃物）を取り出して灰を落とし積み上げるのである。この作業は私の西山寮罹災まで続いた。東横線の工業都市駅か武蔵小杉駅から、南武線の枕木を踏んだり、路肩を歩いて出勤したこともあり、川崎駅回りでも通勤した。工場から提供される半ば焼け焦げのお米で握られたお結びやおはぎをほおぼりながら、友人と駄弁るのが目的で、何時入隊通知が来るか分からない我々は、出勤正常ならざる早退常習犯であった。たしか日給二円が報酬だった。

西山寮には十人近くの学生が下宿しており、一高在学中のガンさんと呼ばれる大変風格のある名物男もいた。ポンプで洗面していると軒下で山鳩の鳴く、商売を抜きにした古びた二階建ての学生下宿だったが、5月25日夜10時過ぎ頃から26日払暁にかけての空襲で焼け落ちてしまった。最初は戦災などかわりのない一夜と思っていたが、近くの輜重兵連隊とかに焼夷弾が落ちたと伝え聞き、やがて帝都線の枕木がところどころ燃え始め、火も寮に近づいてきた。付近一帯が明るくなり、強風に逆巻く火の手が音を立てて吹き荒れ、屋上でバケツを使って防火しても焼け石に水で西山寮が危なくなり、ガンさんの指示で一高の武道場（無声堂）に避難して全員無事だった。夜具は自室にのべたままであり、崖下の防空壕内に入れておいた、衣類を詰めたトランクも燃え尽きているのを翌朝確かめた。一高前駅からの細道には焼け残った樹木や家屋の一角も目に入り、土地の起伏に左右されたのか激しい火勢と熱風が気ままに走った跡であった。

生活の場を失っては親元に帰るほかなかったが、寮の経営者は収入源を失い、しかも住む場所もなく大変なことだった。火が回ってきた時の下宿のおばさんの耳をつんざく悲鳴が忘れられない。渋谷駅で見た掲示で山手線は不通、回復した東海道線は品川駅から発着していることを知り、保証金を払っては買い求めた貸本を収めたリュックだけを背に、品川駅まで歩く覚悟で出発したが、幸いトラックに拾われた。京浜デパート沿いの街路上に行列を作って一晩を過ごし、罹災証明書を示して乗車券を買い、5月28日12時発かの列車に乗り、急行で24時間を要するところを30時間近くかかって山口に辿り着いた。戦闘帽に受け取った乾パンと出征した友人の残して行ってくれた真っ白い切り餅を生のままかじって飢えをしのいだ。空襲を体験したことのない母からは、寝具や衣類の所在を尋ねられ惜しがられた。

6月9日か10日母の知り合いの軍人さんが自宅に見え、私の入隊を知らせてくれた。下宿の罹災と工場の欠勤、そして入隊を担任の一ノ瀬先生宛毛筆で認めて休学届を郵送したが、空襲下の郵便事情を考えると、先生が受け取られたかどうかは疑わしく、戦後も先生に確かめていな

い。

6月18日山口市の西部四部隊に入隊した。営門の前に集った人たちは、寄せ書きをした日章旗を斜めに肩に掛け、家族との別れを惜んでいた。私は奉公袋だけを持って見送りの家族と待機していたところ、中学時代の同窓生数名から、「好い気味だ、軍隊で鍛え直されて来い」と罵られたことが忘れられない。行軍で秋吉洞近くの大田を経て、28日日本海側の三隅国民学校（大津郡三隅町）に到着、大団28346部隊田辺隊に所属した。教室が兵舎となり、学校付近での訓練が始まった。

入隊早々は毒ガス小銃担当と告げられたが、軽機関銃分隊として訓練された。石ころの多い川原で両肘・両膝を使って匍匐前進を繰り返し、木切れで鉄兜を叩かれながら鍛えられた。各自が見よう見まねで編んだ即席のわらじを装着しても、大変厳しく体にこたえた。仙崎港まで行軍し、「貴様らの生死与奪の権は自分にある」と絶叫する中隊長の抜き身の拳銃に脅かされながら、満州から到着したという60キロかの大豆袋を運ぶ体験もさせられた。万事が要領の軍隊では、荷揚げ中に竹筒を袋に差し込んでちょうまかした大豆を豆腐に変える古兵の腕がねたましかった。

本来は入隊三か月後に受けるはずの第一期検閲が近づいてくると、速成兵士の訓練は専ら戦車に対するものになった。ビルマ戦線で考え出されたとかいう戦法は、大地に穴を掘って身を隠し、戦車に見立てた大八車が近づいてくると、かなりの重量の一辺30センチ位の立方体の木箱に砂を詰めて爆雷に見立てたものを、車の両輪の間に投げ出して戦車を爆破し、わが身を地上に伏せれば助かることもあるという肉弾攻撃だった。爆雷は箱爆雷あるいは破甲爆雷もしくは破鋼爆雷かもしれないが、口伝教育なのでつまびらかではない。体中の水分がすっかり汗となって流れ尽くすような真夏の灼熱の炎天下、娑婆では振り向いたこともない真桑瓜でも、小隊長の私費で配られた時の生き返ったようなひとときは忘れられない。軍隊訓練で受けた身体上の苦しさを思えば、相当な苦難であっても克服できないはずはないと、戦後の生活で幾度そう思ったことか。

敗戦は8月17日だったかの軍旗焼却で知らされた。少量の生地の灰を付与され、今時の四十七士気取りで、連合軍に対する復讐を誓わされた。列車の屋根の上にまで人を乗せて、復員は遠距離の高齢者から始まり、一番若い自分たちは憲兵要員として、8月30日三隅から山口の原隊に帰った。遅れてやって来た神風が、敗戦後の木造兵舎に吹きつけ、かなり大きな中隊の建物を土台から揺さぶり、台風襲来の怖さを体験した。次いで豪州軍が進駐してくるので、10月16日秋吉台の演習時に使用する兵舎に移動した。用務といえ、時に将校宅に粉末味噌・粉末醤油・携帯口糧や机・椅子などの備品を運ぶ私用のようなもので、これは使役と呼ばれた。粉末の調味料のあることを軍隊で初めて知った。時に煙草・菓子が一兵卒にまで配布されたが、自分の軍隊経験では酒保など見たこともなかった。当時、喫煙習慣はなく、菓子と交換して随分ありがたがられたものだ。あとは毛布にくるまり横になっているだけの毎日となり、退屈さを紛らわせるための悪戯心から『ほまれ』や『光』を吸ってみて、目が回るどころか美味しくて病みつきとなった。復員時には星二つのボツダム一等兵に進級し、月の手当て10円だかの一年半分かを給付されて自宅に帰り、しばらくの間、蚤と虱退治に熱中しなければならなかった。

昭和21年度．．．大学予科三年

昭和20年5月予科二年で罹災して帰山、入隊・復員と人並みの体験をした。在京する親戚や知人はなく、空襲による惨禍を考えると下宿などあるはずもなかった。それでもL組の友人に下宿探しを依頼し、「復学を願っている者がいることを忘れないでもらいたい」と訴える手紙を書くことが私の仕事となった。そのお陰でか突然クラスメートから電報を受け、昭和21年10

月18日杉並区馬橋2丁目一鳴荘別館内に住んでいた母の知人の好意を頼って上京、21日に予科三年に進級するための追試験を受けたが、下宿などはなく28日には帰郷するほかなかった。三ノ橋の予科校舎（港区新堀町7）事務室に出頭すると、日吉の空襲と撤収で学籍簿が焼けたとかで所属学部・氏名などの自己申告をさせられ、英語・仏語・数学の試験を受け、他の科目はレポートとして山口から送付させて頂くことになった。山崎福二先生が対応してくださったように思う。

入学時には二年制の大学予科であったが、敗戦によって予科は三年制に戻った。勤労働員と入隊だけで予科二年に進級したままだったので、三年に進級するための試験が必要とされた。しかし三年になったまま一日の出席もないので、21年度は原級に止まり、22年度に改めてもう一度三年生としての勉学を続けることになった。

京浜線の川崎駅と東京駅間の海側を見渡すと、すっかり一面瓦礫の山の焼野原であって、復学は果たすことができるとしても、下宿探しとなると別問題で困難の極みであった。食糧事情は最悪、お米を月ごとにいくらか用意すればと言われても、農家ではない私には打つ手立てがなかった。学業を続けるには経済上の問題が大きく、八方塞がりだった。入隊時までクラス担任であった一ノ瀬先生に下宿問題の解決を助けて頂くようお願いして、21年2月には一度上京するよう勧められたこともあった。久里浜の海軍通信学校跡への塾一部の移転交渉、九段禁衛府の学生会館への変身、塾内での学生の福利・厚生部門の創設などをお知らせ頂いた。陸海軍の諸学校生徒には官公私立への無試験の編入が認められたが、私大予科生にはこの門戸は開かれず悶々の日々であった。

私は無収入のまま遊んでいるわけにも行かず、敗戦の翌年昭和21年5月28日から、母のついでに山口県地方世話部雇員に採用され、遺骨班に配属され庶務に従事した。敗戦までの連隊区司令部であり、外地からの復員兵によって持ち帰られた遺骨・遺品、戦没者名簿を受領してご位牌を作り、遺骨箱にお納めして白布に包み、県下各地で御遺族に伝達、靖国神社合祀を申請するなどが業務であった。しかし復学を果たすため、ここを昭和22年3月29日に退職した。

昭和22年度．．．大学予科三年（2度目）

4月17日品川駅着、西山寮にいた新潟出身の友人に下宿探しを助けてもらって、彼のおじさんの知人の縁で、神田神保町三省堂の裏だったかの喫茶店を訪れ、中二階の空いている床部分を借りることにした。友人が帰宅すると、「女給さんが間借りしていて風紀上好ましくない」と忠告され、とどのつまり友人が寄留中の六畳玄関の間に、食事・部屋代なしで同居させてもらうことになり、4月25日大田区大森9丁目2 9 6 笠原由太郎方に押しかけた。こうして下宿問題は他人の犠牲によってひとまず解決したことになり、5月1日から二度目の予科三年生として登校した。

職業軍人だった父は、昭和19年初め南京を発ち、ダバオ方面の南方に行くという言い伝えをしたままの生死不明だった。敗戦の翌年2月南海派遣ラバウル第一集団本部、つまり捕虜収容所からの軍事郵便ハガキで生きていることが分かり、21年5月突然復員し帰国、一か月余り復員局囑託として残務整理に従ったあと、公職追放で無収入となった。女学校を出たばかりの妹が銀行勤め、彼女が唯一の現金収入者であり、郵便貯金からの教育費用の引き出しも在学証明書を見せての制限付きだった。学資が無くなれば退学する前提で復学を果たしたのである。なお父は私の卒業前年度昭和24年12月に死去し、以後母の弟が母に小遣いを月1500円渡してくれて、間接的に私を補助してくれた。

ともかく予科卒業を取りあえずの目標として、三ノ橋の授業には真面目に出席した。教師の方も心得たもので、一年後輩に当たるクラスの外国語の授業など、戦争中の動員で行えなかつ

たらしく、かなり程度を下げていっているように思われた。予科を終了して退学するかどうか、私にとっては何よりの頭痛の種であった。

昭和23年2月29日、数寄屋橋のたもとをたまたま京都出身のL組の友人と歩いていて、学生ピーナツを売っている丸帽姿の藤原工大の塾生を見かけ、友人が声をかけてくれた。明治学院在学中の学生だかが主催する学生互助会という団体のあることを知った。記憶も定かではないが、御茶ノ水駅近くの本部事務所を訪ねてピーナツ売りをさせてもらうことになり、どうにか学部に進学して学業を続ける目安ができたと思われた。とはいっても学生が本業なのか、アルバイトが本業なのか分からなくなるありさまだった。

以後アルバイトは学生ピーナツ売り、アイスキャンデーの製造・販売、闇のコッペパン売り、リンゴ売り、鋳物工場での砂落としと続けた。予科三年を終了したところで、一ノ瀬先生の好意で日本育英会奨学資金の申請をしていただき、昭和23年8月21日に採用通知を受けて、学部一年から卒業までの間授与された。就職後に結核・手術による入院中を除き、毎年年度末に返還した。家からの僅かな送金の他に、奨学資金と学生アルバイトによる現金収入がなければ、学業の継続などできるはずはなかった。

昭和23年度．．． 大学学部一年

学部入学式は昭和23年4月12日で、とりあえず進路を文学科フランス文学専攻に決めて、午前中は授業を聴講、午後はピーナツ売りに変身した。幻の門の前近くの外食食堂で昼食をとって、事務所に出向き、割り当てられたその日の場所にダンボール箱と簡易な折り畳み式の台を持って出かけるのである。

3月2日地下鉄銀座線の京橋駅の出入口に初めて立った。まじかには赤レンガの東京相互銀行のビルがあったと思う、ウイスキーグラス一杯分のピーナツが三角形のセロファン袋に入れられてダンボール箱に2100個詰めてあった。二袋15円で売って幾らかもらったが思い出せない。退社時の勤め人を狙って「二袋15円の学生ピーナツはいかがですか」と呼びかけるのだが、いつごろから声が出るようになったのだろうか。新橋駅構内では新聞売りの兄ちゃんに、ちょっと貸した学生服にはおるジャケットを持ち逃げされたり、日本橋白木屋横の地下鉄口では、路上にかなりの紙幣を落とした人に声をかけ、後から自分のものにしておけばと思ったこともある。

そのうち数年前慶大予科に在籍して、浅子先生から国史を教わったという東大法学部の学生から声をかけられ、所属するグループからの独立に誘われた。新しい団体は有楽町のガード下にあった日の基事業団で、選挙時には社長を応援し、学生グループに出資してもらったらしい。東大農学部院生と法学部学生の二人がボスで、今度は東横線のガード下・渋谷区並木町31吉田文一（あるいは又一）さんのウドン製造所と同じ板囲いの中で、アイスキャンデーの製造・販売に当たった。5月13日大森の笠原さん宅を引き上げてここに移り、蛍友会と名乗って19日から製造機の運転を始めた。板囲いの中には一畳半位の板敷き小屋があり、ここがねぐらであり、事務所にもなった。

市販されているサクサクとした歯応えのするアイスキャンデーが製造できず、砂糖の代わりにサッカリンやズルチン、あるいは澱粉を使ったりして苦労した。夜遅くまで製造して冷凍庫を満杯にしておき、陽が上がって暑くなると近くの渋谷実践・青山学院などの学生が集まってくるので、彼女らにキャンデーを卸すのである。製造所は渋谷駅裏口を利用する人たちの通学路上にあった。木製小箱を肩に周辺を恵比寿あたりまで売り歩き、箱に残った箸の本数を確認して、販売本数の代金を納めてもらうシステムだった。常時稼動しているモーターが製造・保存の原動力であり、区画内に響く騒音は相当なものだった。徴収した代金をボスに渡した後の

ことは残念ながら知らない。

アイスキャンデーは秋風の訪れと共に売れなくなり、渋谷駅裏口に降りる担ぎ屋さんの荷物を預かって、9月初めだったか渋谷警察の裏手の道場に同僚と二人、引き止められて正座させられたこともある。闇のコッペパンを軍隊時代の雑嚢に入れ駅近くの日本通運の仲仕さんに売り歩いたり、井の頭線ガード下の店先でリング売りの経験もした。10月中旬からは千葉県松戸とかから仕入れてきた落花生を煎って、キャンデー製造機の上に広げて冷やし、ウイスキーグラスで量って袋に納めて学生ピーナツを作り、販売範囲を新橋駅までと限って、地下鉄沿線各駅で学生を使って販売した。昭和24年2月6日ボスたちは、キャンデー溶液と割り箸を入れて、アンモニア液のタンクに漬けて製造に使用した多くの金属管を売却して急場をしのいだ。板囲いに集まって働いた学生たちも徐々に姿を消し、私も昭和24年2月17日には大森の笠原さん宅に帰った。

昭和24年度／25年度．．． 大学学部二年／三年

旧制私立大学最後の学生として、昭和25年9月に卒業するまでの一年余は笠原鑄造合金の鑄物工場で砂落しに従事した。授業があれば午前中だけ聴講し、時間のある限り卒論の準備にも当たった。一緒に入学し中国から復員・復学し、私を自分の部屋に同室させてくれた一歳年上の友人は、昭和25年3月英文科を卒業したが、希望したジャーナリズム界には適当な就職口がなく、経済的には恵まれていたので9月過ぎまで高等遊民だった。そのうち彼は別天地を開拓するとかで函館に移ることになり、私は一人となった。

入学時から起算すれば本来昭和25年3月卒業のはずだったが、復学が一年遅れて昭和26年3月卒業予定のところ、学制改革により繰り上げで昭和25年9月末の卒業となった。翌年3月まで在籍することは認められたが、育英会の奨学資金が9月打ち切りと決まり、学業を続けることはできなかった。たまたま慶應義塾図書館の館員募集があり7月28日に応募したが不合格、8月には中学時代の担任でもあった数学の教師が、山口県の教育委員会に勤務しておられた関係から、山口県都濃高校と安下庄高校の英語教員の就職口を紹介されたが、英語担当には自信はなく、県の実施する統一試験を受験しないで教員になれる最後の機会であったが辞退した。8月7日慶應義塾塾監局事務員募集の掲示に応募して、三田と日吉のそれぞれで面接を受けて採用され、9月11日から日吉事務室に出勤した。

教務課でトレーニングを受けていたところ、日吉研究室開設の運びとかで、16日から図書館日吉分室・事務室の片隅で教員用図書整理に当たることになった。図書整理のにわか勉強と図書館側の指導を受けながら、リング箱に詰めて積み上げられていた図書（主体は旧予科図書室所蔵の和洋書）の登録・分類・装備を12月までに終えた。

また永い間寄留させて頂いた笠原家の次女の方の結婚も決まったとか、お祝いをお思いながら懐具合は苦しく、昭和25年12月10日蒲田駅近くの大田区女塚2-6唐沢寿寿子方に転居した。塾の給料は低く、六畳二人の相部屋での下宿生活が始まった。昭和26年春休みには塾図書館方式による和書目録の作成に着手し、5月7日旧日吉寄宿舎の北寮に引越し、ここが大学教員の研究個室・書庫および事務室となり、15日日吉研究室が開室した。

この文を書くに当たり、六〇年前の日記帳をひもといてみた。山口中学時代の担任・武田義孝先生はベルリンオリンピックの体操の主将だったが、私が中学四年の頃結核で亡くなられた。先生は日記をつけることを奨励され、その影響を受けた。日記は戦争が激しくなってからは検閲を恐れて鉛筆書きにしたり、インク不足で粉末インクを水で溶いて使用したため、判読できないところがあった。しかし今回日付を書き入れることができたのは、この日記のお陰である。また、母もよく手紙をくれていたことが大変役に立った。今は亡き母に感謝を奉げる。

(元慶應義塾大学日吉情報センター副所長)